

パネルディスカッション⑤：全体

「高知県グローバル教育シンポジウム」 パネルディスカッション

テーマ 「国際的な視点をもって地域や国際社会で活躍できる人材とは
～生涯学び続ける力を育む国際バカロレア～」

・パネラー

長谷川壽一氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）

田宮 直彦氏（株式会社日立製作所人財統括本部人事勤労本部長）

松木 秀彰氏（文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長）

石筒 覚氏（高知大学地域協働学部准教授）

長嶺沙綾子氏（IBDP 卒業生・サンディスク株式会社勤務）

・コーディネーター

坪谷ニューエル郁子氏（国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員）

（コーディネーター）

さて、今日のパネルディスカッションのテーマは、「国際的な視野を持って地域や国際社会で活躍できる人材とは」。そして副題として、「生涯学び続ける力を育む国際バカロレア」とあります。今、石筒先生から、バカロレアの10の学習者像についてのお話をいただきましたが、私は、その中にもしかすると答えがあるのではないかと考えております。

長谷川先生は、基調講演の中でお話をいただいておりますけれども、長谷川先生、ちょっと先生のお話に関してまして補足がございましたら、お願いしたいと思うんですがいかがでしょうか。

（長谷川壽一氏）

ただいまの坪谷さんからの問いかけですけれども、私、再三申し上げた、課題解決力とか生涯学び続ける姿勢というようなことはその通りでございます。それから多様性、多様な文化に対する理解ということも再三再四申し上げました。先ほど田宮様の方から、企業が求める人材ということで、柔軟な頭で物事の全体像を捉えられる人材とか、既成概念にとらわれずチャレンジ精神を持ち続ける。これは極めて大事だと思います。

これまでは、私の今日のスライドの中の一つのポイントは、この釣り鐘型だったんですけれども、今は発想の転換の時期で、これまでの高度成長時代は一生懸命ただ先生の言うことをきちんと学んで良い点数を取ってれば、企業に行っても、技術を身につけながら、それに基づいて職階も上がりますし、収入も増えていくという右肩上がりだったわけですが、このようにこの先、日本の

パネルディスカッション⑤：全体

産業構造も変わってくる、世界との付き合い方も変わってくるとなると、これまでの既成概念をどうやって打破して、どういう新しい発想ができるかということが大事です。

スティーブ・ジョブズというアップルの社長は、次のようなことを言っているんですけども、「変わるコストと変わらないコストを秤にかけると、変わらないコストの方がはるかに大きい」ということです。変わらないで現状維持でいるということは、それが一番安穩としていられて心地よいと言いますか、何もわざわざ新しいことをやらなくて済むわけです。けれどもこの先は、それだと世界の変化に付いていけないわけです。どうやって自分自身を打ち破っていくかというそういう力。これが今求められているんだと思います。

それが、今思えば、アップルとそれからソニー、20年前だったならば、もしかしたらソニーの方がブランド力も強かったかもしれませんが、スマートフォン一つにしても、アッという間に引き離されてしまいました。スティーブ・ジョブズのように、既存の概念にとらわれず、彼は「リベラルアーツが非常に重要だ」と言っているわけですね。専門的な知識集約的な力というのは、せいぜい賞味期限は、私は5年から10年だと思います。けれども、そういう新しい発想が生み出せるような考え方の源泉、堆肥と言ってもいいかもしれませんが、後々、木が大きく育って、しっかりとしたフルーツになるためには、若いうちにしっかりと柔軟に、新しいことを次々と考えられる力を養うことが何より大事だというふうに思っております。以上でございます。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

では、松木様。ご講演の中でもいろいろとお話をいただいておりますが、補足をいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

(松木秀彰氏)

20分の時間で駆け足になってしまったんですけども、1点補足といたしまして、私は、実は国際バカロレア以外にOECD（経済協力開発機構）の担当をしております。先日、ちょうどパリでテロ発生直後でしたが国際会議がありまして、私も行って参ったのですが、OECDの中では、やはり将来、予測が難しい社会になっていく中で、今後、子ども達にどういう能力が求められるのかといったような、まさに日本でやっているようなのと同じ議論がおきていまして、そういう時期にも関わらず結構多くの国が、月曜日に会議があったのですが、その月曜日のセッションには多くの国が参加して非常に熱心に話を聞いていたと。やはり日本だけではなくて、世界各国が同じような認識を持って改革を進めようとしているんだなということ実感いたしました。

パネルディスカッション⑤：全体

そこで、改めて国際バカロレアの、10の学習者像というのを振り返ってみたいんですけども、今、OECDで基本的に議論が始まったばかりであります、必要なのは知識とスキルと行動、それからメタ認知、この4つが重要だと。

メタ認知というのは、知識、スキル、行動のうち、どういったところが自分は得意で、どういったところが不得意かということ、高い次元から眺めて認識するといったような難しい用語ではございますが、この4つが重要だといったような議論が始まっているんですけども、この国際バカロレアの10の学習者像、10個の中には、この4つが全て含まれていると。知識のある人というのも入っておりますし、その知識を活用して課題を解決するという考える人ですとか、あとそういった知識やスキルに限定されない人格形成的な部分ですね、心を開く人とか、チャレンジをする人。リスク低下と言っていましたけれども。それからメタ認知に相当するもので、最後に振り返りができる人といったものも入ってまして、非常に、何と言うんでしょうか、日本の議論だけではなくて、世界の最先端の議論も先取りしてしまっているような、非常に完成度が高い優れたプログラムであるということが、国際バカロレア・プログラムについては言えると思います。

そういったこともありまして、我々もこの自信を持って、国際バカロレア・プログラムを引き続き推進していきたいというふうに考えている次第でございます。以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

さて、これからこの国際バカロレアの教育というのは、日本で広く導入がされるわけです。そこで各パネリストの皆さんにお聞きしたいんですけども、バカロレアの教育が導入されることに対してどんなことを期待していらっしゃいますでしょうか。

まず、長谷川先生、よろしくお願ひいたします。

(長谷川壽一氏)

大分申し上げたことの繰り返しになるわけなんですけども、また先ほど他の先生も仰ってましたが、若いときに、いきなり海外に留学しろと言っても、それは非常に難しいことでございます。しかし、このディプロマ・プログラムをやれば、そのことを通じて、日本に居ながら国際的な感覚を身につけることができる。この資格を取って、私は日本の大学人ですから、東京大学に来て欲しいんですけども、東京大学ではなくても広く世界に飛び立つ、そういう人材が出て来る。これによって、日本の将来の宝物である若者たちをどんどん、多様な人材を世界に送り出す、磨き上げて送り出すことができる。

パネルディスカッション⑤：全体

バカロレアはそういうことが可能な教育装置といたしますか、教育プログラムだと思っております。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

企業のお立場から、この国際バカロレアの教育が日本に導入される、それが今まではインターナショナルスクールが中心だったんですが、一条校の中でこの教育が展開されるということに関しまして、田宮様、どのようにお考えでいらっしゃいますでしょうか。

(田宮直彦氏)

先ほどお話したとおり、我々のような企業もグローバル化の波に直面しているわけですね。実際にお客様も、それからビジネスを一緒にやるパートナーも、場合によると、同僚もノンジャパニーズの方と仕事をやらなければならないという状況になっています。例えば、我々の日立の本社の人事の部門にも、英語でしか喋れない、日本語の喋れないフィリピンから来た人事のマネージャーと一緒にいまして、そういう状況になってくると、やはり今までの日本人だけで、日本人のお客さんと仕事をしていたようなやり方では通用しなくて、特にコミュニケーションのあり方については、みんな同じ背景を持って、ある意味、阿吽の呼吸で会話ができるようなことが、そういう方とは通用しないので、やっぱりきちんと情報を集めて、それを分析し、それを以って自分の考えをつくって、それに対してまたそれをきちんと相手に伝えるという、そういうスキルがどうしても必要になってくるわけです。それが、国際バカロレアのプログラムの中では随分やっていただけじゃないかなというふうに思っていますし、それがもうマストになってきているんじゃないかなというふうに思います。

併せてもう一つ、英語だけじゃないんですけども、英語もコミュニケーションのツールとしては必然になっていまして、先ほどのフィリピン人の人事マネージャーがいる会議では、我々も英語でしかやれませんので、英語でやらざるを得ないということですので、バカロレアを通じてコミュニケーションのツールとしての英語も学んでいただけるのかなと。

実際、我々ぐらいの年齢になると、「英語ができません」と言って逃げ切ろうとする人間もいるんですけども、今、人事上の配置を決めるのも、英語ができないとある程度限られた部署しかできないという状況になってまして、社内で英語を公用化するというようなことはやっていないんですけども、そういう会社ですら、英語は非常に重要になってきています。

そういう意味でいうと、バカロレアが日本語でも一部学べるようになったというのは良いことだというふうに思いますが、その普及という観点では良いと

パネルディスカッション⑤：全体

思いますけれども、そのどこまで日本語でやって、どこを英語にするかというのはよく考える必要があるかなというふうに思います。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

今、大学入試改革、高大連携ということで、教育改革の真っ只中でございますが、松木様、国際バカロレアの担当官といたしまして、今どのようなことをお考えでいらっしゃるのでしょうか。

(松木秀彰氏)

今、ご紹介ありましたとおり、高大接続改革というものを進めておりまして、私は20分の説明の中で申し上げましたとおり、今、知識の量を問うといったようなスタイルの教育のあり方から大きく変わろうとしているというところがございます。象徴的なのは、大学入試センター試験というものを廃止しまして、新しい試験を導入するといったような議論を、今、文部科学省の中で行っていると。どういったテスト方式にするのかは、まだまだ議論が必要でございますけれども、そういったところでは、やはり課題解決能力の育成といったものに力点を置いた、そういった試験の内容にすると。単なる知識の量ではなくて、課題解決能力を図るようなものにするといったような改革を進めていると。また、それに併せて、高等学校の段階でアクティブ・ラーニング方式を導入して、高校学力の基礎テストといったようなものを導入しようというふうに、今、考えています。

したがって、国際バカロレアプログラムが既に実現しているところを、一般のそれ以外の高校とかでも、いわば国際バカロレア的なところにどんどん進んでいくと言ったような、全体が課題解決能力の育成を重視するといったような方向になっているというところでございます。

こういったグローバル人材の育成のための教育のシステムというのは、高知県をはじめとする地方でも非常に重要になってくるのではないかと、私は個人的に考えておりまして、今後、労働力人口が減っていくといったような流れの中で、一番大きな影響を受けるのは地方ではないかというふうに思っておりますし、グローバル化の影響がどんどんひしひしと伝わって影響が及んでくるといったようなこともあると思います。

なので、ぜひこういう高知県において、国際バカロレアの導入を始めまして、グローバル人材の育成や、課題解決能力の育成といったようなところに、ぜひチャレンジに取り組んでいただきたいというふうに考えております。以上でございます。

パネルディスカッション⑤：全体

(コーディネーター)

ありがとうございます。

石筒先生はいかがでしょうか。

(石筒 覚氏)

高知県の取り組みも合わせて紹介させていただきたいんですけども、本日のシンポジウムのカラーのパンフレットの丁度真ん中に、文部科学省が進めるアクティブ・ラーニング（能動的学習や本県が推進しているキャリア教育）というようところが表現であるんですが、実は、高知県はいわゆる高大接続、高大連携の取組はかなり長く行っております。既に高知県の3大学と高知県の県の教育委員会、市の教育委員会と合同で、高知県高大連携教育実行委員会というものをもうつくって、まだ10年になりませんが進めています。実は、その取組のコアな部分は、アクティブ・ラーニングをずっと高校の先生方と大学の教員、そこと生徒さんが入ってずっと実践的な取組、いろいろトライアンドエラーをしながらやってまいりました。

例えば、高知西高校と高知大学ではクリエイティブ・シンキングという授業を、今年度はやっていないんですが、昨年度まで、これは平成16年、2004年ですから10年近く取り組んで、大学でやってきたいわゆる少人数型のアクティブ・ラーニングの授業を、高校生と先生方と一緒にやろうという取組を10年くらい進めてまいりました。これは夏休みのいわゆる集中講義で、本当に朝から夕方まで高校生にとっては非常にハードなんですけど、それをトータルで6日間くらいやるんですね。先生方も入っていただいて、一緒になってやり方を試行錯誤で考えるということをやっています。それが高知西高校の今の1年生でグローバル探究Iという授業で、1年生全員に導入されていますが、先生方は、今、苦勞されて取り組まれていますけれども、そういった形で今の流れができています。

幡多地域の方では、中村高校を中心に自立創造学習という授業を、これも大分前から行ってアクティブ・ラーニングの授業をやってきています。それは、このバカロレアを目的としてやっていたわけではないんですが、やはり大学教育の現場でも、こういうアクティブ・ラーニングのものが必要になってきていると。もともとは医学部でPBL（Problem Based Learning：問題解決型授業）というものが大分前から始まっていて、そういった認識が理系の方で割と出てきたり、それが文系の方にもやはりそういった学習方法をもっと取り入れる必要があるというふうな。大学では比較的少人数でやる、研究も少人数になりますので、そういった動きがあったものが、「これは大学だけではないよね」という話が高校の先生ともあって、じゃあ高校の現場でどういったことができるかという取り組みを長らくやってまいりました。

パネルディスカッション⑤：全体

そういった意味では、いわゆる学び方という観点では、このアクティブ・ラーニング、もしくはバカロレアで求められた学習者像に向けた学び方というのは、高知県では割と取り組みやすい、取組を進めやすい環境にあるのかなと思います。

高知南高校でも1学年を挙げてキャリア教育を進めてこられたと、今もやられています。教科の中で、特に今、現在教科の中でまたこういったアクティブ・ラーニングの取組を導入して、高知南高校と高知西高校と今、同時にそういった新しい取組を進められて、これは将来的に統合して行って高知県のアクティブ・ラーニングの一つの形になるだろうと。そこにこのバカロレアというところも入ってきて統合される、統合という表現が正しいのかどうか分かりませんが、イメージとしては、そこに集約していくという形が見えてくるのかなと思います。もちろん他県でも、そういった動きはいろんなやり方で出るとは思いますけれども、少なくとも高知は一つの動きとしてそういったことがあるだろうと思います。

私が所属している地域協働学部は、今年の4月に開設をされた新しい学部なんですけれども、かなり学びの中でアクティブ・ラーニングを取り入れているのと同時に、ほぼ学部が求める人材像が、このバカロレアの学習者像に改めて見てなっているなというように思います。

大学教育でも、こういった能動的な学習の仕方というのは続けて行って、恐らくこれは企業に入っても繋がって行って。今まではなかなか繋がりができていなかったんですね。大学自体もなかなかそういったものができていなくて、企業もかつては能動的でないケースの働き方があったのが、今、求められているのも明らかに能動的になってきていると。大学もそちら側にシフトする。シフトというよりはそういった要素も取り入れる必要がやはり出てきたとなつて、中等教育、中学、高校もそういうふうに変化していると。もしかしたら、小学校が一番アクティブな学びをしていたのかもしれませんが、中学、高校に入らる中で、いわゆる講義型のものがだんだん強くなって、大学もそうだったということがあろうかと思います。そういった意味では、日本での学び方が全体的に変化している中での、一つの動きだというふうに捉えてもいいのかなと思います。

高知という観点で言いますと、先ほどから何回か出ている、答えのない問題に取り組まなくてはいけない状況がいろんな社会である中で、高知県ももちろんそうだと思います。よく「課題解決先進県」とか「高齢化の先進県」と言われていますけど、確かに世界中見てもその解決策を持ったところというのはなかなかなくて、本当に試行錯誤で見ていくしかないような状況があるとすると、やはり新しいものにチャレンジして、それは失敗するかもしれませんが、チャレンジしないと答えが出てこないという現場が次々あると思います。

パネルディスカッション⑤：全体

そういった、特に若い世代を育てていく方法の中で、やはりこういったバカロレアの考え方というのは重要であろうと考えますし、これはもちろんバカロレアだけではないと思いますけれども、非常に端的にこういった人材像を表すということで、僕らの理解を深めることにとっても、非常に意味があるのかなというふうに考えています。

(コーディネーター)

石筒先生ありがとうございます。

さて、バカロレアの卒業生でもあられます長嶺様、このバカロレアの導入に関しましてどんなことを期待していらっしゃるのか、お話を伺いたいと思います。

(長嶺沙綾子氏)

例えば、IBの過程では理系の方に進みたいと考えていても、必ず外国語や社会科学系の授業を選ばないといけないというようなことになっていまして、その逆も然りで、例えば理数系がすごく苦手だというふうに感じていても、必ず数学と理系のどれかは取らなければいけないというような仕組みになっています。ですので、IBを修了することによって、5つないしは6つの分野からバランスよく学ぶことができ、リベラルアーツということで、そういうことを身に付けることができたと思っています。

先ほど説明もありましたように、IBをやることによって一部のアメリカの大学などは、単位の方を免除されたりですとかもありますし、イギリスの大学には一般教養という課程はなくて、例えば物理学科で大学に入ったとしたら、1年目から物理と数学しか勉強しないんですね。それでも私が大学で一般教養を習わなかったからといって、基礎的な知識のところで周りの人と劣っているなというふうに感じたことはないわけで、それはIBのほうで広くいろんなことを学べたからだと思っています。

それから、IBで学ぶのは知識そのものだけではなくて、知識を求める姿勢というのを学ぶのかなというふうに思っています。例えば、習わなくても知らないことで自分の興味のあることは、積極的に自分から調べて勉強しようという姿勢が身につくのではないかなと考えています。知識を求めてそれを活用するという、そういう勉強の仕方というのをIBを通して身につけることができれば、それは大学ですとか、社会に出てから非常に役に立つのではないのかなと考えています。

先ほど、お話できなかつたんですけども、TOK (Theory of Knowledge) という授業がありまして、知の理論というふうに訳されていますけども、これは、人はどういうふうに物事を知るのかということ突き詰める、なんと云います

パネルディスカッション⑤：全体

か、ちょっと哲学的な教科ではあるんですけども、そこにおいては知識というのは受け取るだけではなくて、いろいろな角度から考えることが重要だということをお教わりしました。

先ほど、松木さんの方から TOK でこういうテーマで話しますよという一覧の方があったんですけども、私がクラスメートとやったディスカッションのテーマで覚えているのは、例えば「歴史というものは学校の授業として本当に必要なのか」という問いですとか、後は「科学的に思考しなければ真実を探することはできないのか」という問いがありました。答えは一つではないというか、決してどちらかが正解と言えないような、そういったテーマ、一方的に自分の意見を言うだけではなくて、相手の反対意見を聞いて、それに対する反論を考えるというようなそういう訓練と言いますか、そういうのをずっとやってきたということになります。

TOK はただ習うだけではなくて最終的に試験がありまして、決められた時間内でテーマについて深く考えて、それをまとめる力というのが非常に重要になってきます。私、本当は TOK の授業というのは余り得意ではなかったんですけども、物事を多角的に見ようというそういう癖というのは、IB をやって身に付いたのかなというふうに思っています。

最近、社会や企業とかで、ダイバーシティの必要性というのがよく聞かれると思うんですけども、思い返してみれば、TOK の授業でそういった感覚というのが得られていて実践できているのではないのかなと思う節はあります。

私の場合は、ロンドンのインターナショナルスクールで IB をやったので、改めてグローバルということ強調しなくても、既にグローバルな環境だったんですけども、日本の場合どうしても周りの人がほとんど日本人ですし、ともすれば他の国々のことについて考えるきっかけというのは余りないかもしれないです。その中で IB というものをしていくことによって、日本だけじゃない国々のことについて考えて、他の国の文化ですとか、宗教ですとか、そういったことに理解を深めて、違いを認めた上でディスカッションしてコミュニケーションをとっていく。そういったことが、IB を通して得られるのではないかなと思っています。以上です

(コーディネーター)

パネリストのみなさまありがとうございます。

今までのパネリストの皆さんのお話を聞きまして、会場の皆さんには IB の教育というのは、まさに大学や企業が求められる人材の育成、これに役立つということがちょっとお分かりいただけたんじゃないかなと思います。

また、長嶺様の今のお話で私が大変印象受けましたのが、まず一つがリベラルアーツ的な位置づけにある。つまり、理系・文系両方とも学ぶんだよという

パネルディスカッション⑤：全体

ことですね。そして2点目が学びの方法を身に付けることができた。つまり、生涯にわたって私たちは学び続けていくわけですが、どうやって学ぶのかといったことが IB の教育から学ぶことができたというところにあるのではないかと思います。

さて、今回この高知で IB の認定校を設置しようということですがけれども、高知には高知ならではの IB の教育というのが推進されたらいいなというふうに私も期待している次第ですが、パネリストの皆さんにお聞きしたいんですけれども、ここ高知で IB の教育が始まるということに対して、どんなことを期待されますでしょうか。

最初に、松木様いかがでしょうか。

(松木秀彰氏)

そうですね。グローバル人材の育成に資する非常に優れたプログラムが国際バカロレア・プログラムなんですけれども、これについては、国立大学協会や今日、他の方のプレゼンの中でも紹介されておりましたけれども、今年の9月14日、国立大学の将来ビジョンに関するアクションプランというものを発表されまして、国際バカロレア入試等の導入を拡大するといったような方針を示されています。

国立大学の中期目標・中期計画というのが来年度から切り替わるということで、実はいろいろ中期目標・中期計画案というものが各大学から出ているんですけれども、北海道大学とか東北大学、山形大学、筑波大学とか、多くのその国立大学が中期目標ないし中期計画の中で、国際バカロレア入試を導入するといったような趣旨のことを何らかの形で明記するといったような流れになっております。そういった動きもございますので、ぜひ高知大学にもというふうにお願ひしたいところがございますけれども、いずれにも、こういった動きが今後広がっているといったようなことがございます。

できましたら、グローバル人材の育成ということで、この高知で新しくできる高校を卒業された方も当然国外に飛び出してもいいですし、県外に飛び出してもいいんですけれども、グローバル人材というのは、恐らくこの地域においても今後ますます必要になってくると。余り詳しくはないんですが、TPP というものも基本的な枠組みを合意しまして、1次産業も含めて国際競争にさらされるといったようなことに今後なりますし、地域の産業界にもグローバル人材は必ず必要になる。そういったときに、地域でグローバル人材として活躍するといったような道もぜひできたらいいなというふうに思っています。

そういった、今後、高知県にとってどういう人材が必要なのかということもぜひお考えいただいて、高知県を上げてこの今後のことに取り組んでいただきたいなというふうに思っております。

パネルディスカッション⑤：全体

(コーディネーター)

ありがとうございます。長谷川先生は、この高知で国際バカロレアの教育が始まるということに関しまして、何かご期待されるようなことはありますでしょうか。

(長谷川壽一氏)

もちろん非常に大きく期待しております。

東京大学は先ほど申し上げましたように、大学入試の仕組みを今年から現在進行中で変えつつあります。その背景となりましたのは、東京大学の入学者の多様性を増す必要があるということを大学の方で考えたからです。

その背景となる資料としては、この10年くらいの東京大学の入学者を見ると、東京のいわゆる進学校で、非常に東大入試に特化したような教育を行うような高校の出身者の比率がじわじわと増えてくると。そうすると同じような学生ばかりになってしまうわけですね。かつての東大は全国区の大学で、いろいろな県立高校とか府立高校とか、そういうところの学生さんたちが、多様な背景を持った人が入ってきたわけなんですけども、それがそうでなくなりつつあることに大変危機感を覚えました。

現在、導入いたしました推薦入試というのは、各校から男女1人ずつしか推薦できないですね。ということは、女子校だったら1人、男子校からだったら1人なんですけども、そうすると首都圏の進学校でも毎年何十人と東大に進学するような人でも1人しか推薦できない。しかし、地方からも各高校が推薦できるわけですから、そのチャンネルを通じて高知県だけとるわけにはなかなかいかないんですけれども、地方からの人材、特に地方から東大で学んでもらう女子学生が増えればいいなというふうに思っています。

この先、グローバル化が進むと恐らく日本国内でも東京圏に対する集中度というのは高まることが予想されます。しかし、それは地方にとっては非常によろしくないことをごさいます、東京とそれから地方の関係がバランスよく発展するためにも、東京で学ぶ学生さんはまた地方にUターンしてもらうということも必要だと思いますし、いろいろな意味で、バカロレアの卒業生が今後の日本の大学の多様性を増すという点で期待できる。とりわけ、私の同級生でも高知出身の仲間が結構いるんですけれども、私はずっと東京育ちなんですけど僕とは全然違う発想して、彼らと話していると僕自身も得るところ大変多かったんですけれども、高知県でさらにバカロレアのようなタイプの教育を受けた人が日本を変えていくと。将来の新しい龍馬さんみたいな人が、高知からどんどん輩出していただければなというふうに思っております。

パネルディスカッション⑤：全体

(コーディネーター)

ありがとうございます。

石筒先生、まさに石筒先生の足元のこの高知県で、しかも公立の学校で IB の教育が推進されるということにおきまして、先生の方ではどんなことを期待されておられるのか、ちょっと一言いただけますでしょうか。

(石筒 覚氏)

先ほどからプレッシャーがあるんですが、僕は高知大ですけど、高知大学の入試に関してあまり権限はありませんので、本来はそういった責任のある立場のある方が発言されるとよかったですけど、あくまで私自身の個人的な考え方というか、期待なんですけど、大学での、特に国立大学でのバカロレアの導入というのが、今、始まっていますが、いくつかの資料、今日、配布資料の中で導入した大学の名前が出ていると思います。見ていくと、比較的大きな規模の大学が、国立大学を始め多いんですが、例えば、地方大学としては、岡山大学もそうですし、鹿児島大学なんかも導入されているので地方大学ができないということではないんだろうな。現場からするとちょっと誤解があって、バカロレアは全部英語でやられるのかという割と昔ながらの誤解があるだろうと思います。だから、全部英語の人が受けに来たら、うちが対応できないよというようなものがあって、それは今、日本語のプログラムがあるのでそうではないということがだんだん分かってくると思いますし、特に海外からくるというイメージが少し強いので国内の高校での導入、中学・高校での導入というのが増えてくると、これはもう解消されるだろうと思います。

もう1つ中身の点で言うと、ここはまだあまり理解が進んでいない部分も多いのかなと思います。先ほどの学習者像にありましたし、それからディプロマ・プログラム、資料だと28ページに出っていますが、課題論文があって、先ほどの長嶺さんのお話で TOK (Theory of knowledge)、この知識を学んでいると。さらに、3番目に「創造性・行動・奉仕」というのがありますが、いろんな地域社会と結びついた活動をしてきている。これも非常に重要なポイントで、最終的に大学からするとここまでやってきてくれれば、ほとんど Welcome な状況なんだろうと思います。恐らくは、こういうことを学んで経験した生徒が受けてくるというところの理解はまだ十分ではないのかなと思います。半面、入ってくるまでに、例えば、ディプロマ・プログラムを本当に経験して来たら、これはぜひ来てくださいというふうに、本来はなるはずですので、そういった意味では、あまりハードルが高いものではなくて、割とこの数年とは言えませんが、短期間の中で導入校は増えてくるだろうと思います。大学側の理解が進めば増えてくるんだろうなと。その意味では、文部科学省さんにより理解を深めるようなプロモーションとかアプローチをお願いしたいなと思

パネルディスカッション⑤：全体

ます。

高知県でこのIBを導入した結果どうですかね。もしかしたらグローバルなので、出ていってしまうのではないかと。戻ってこないのではないかと。これまでも言われていた、県外の大学に出て行って戻ってこない。戻ってこない側からすると戻ってきたいけど働く場がないんだと。教員になるか、県庁に行くか、銀行に行くかしかないぞ、みたいなことの誤解が多いんですが。実は高知県にも中小企業たくさんございます。そういったところで活躍できて、働ける場が実はたくさんあるんですが、これは企業と大学の努力が要ると思うんですけど、そういう場があるという認識も弱いと同時に、恐らく仮に県外にでたととしても、このバカロレアのプログラムで培った基本的な能力というのは、本当に日本だけではなく海外でも通用します。もちろん、高知に戻ってきても十分役に立つでしょうし、逆にそういった能力を大学の中でさらに高めて戻って来てやろうと。今までは仕事のイメージが職場のイメージだったんですね。例えば、どこかの企業で働くぐらいのイメージだったのが、やはりこういうことで高知の課題に向き合いたいというふうな能力が、これはどこの大学に行ってもこの基礎ができてくればより伸びるのではないかなと思います。

そういった意味では、やはり高知県で、特に中等教育の中で、このバカロレアのプログラムができるというのは非常に重要な動きだろうというふうに考えています。

後は、じゃあ高知県ならではというところをある程度つくっていかないといけないのかなと。これはまたいろいろ今後教えていただきたいと思うんですけども、やはり高知ならではのプログラムの作り方。先ほど「課題解決先進県」というふうに言いましたけど、それだけではなくて、ここが持っている自然環境、いろんな地域資源があります。それから、人というのもあると思うんです。例えば、今、高知西高校は食をテーマに1年生がいろんな勉強をしていますけれども、これは皆さんも共通で感じておられるそういった文化的な深さというか、そういったものを地域の資源を上手く活用しながら、課題解決に向かうような発想というか、物の見方というのをできるだけ、もっと若い段階で付けて欲しいなど。これは早くそういった意識があれば、将来、仮に県外の大学に行っても、また戻ってきてそこに取り組もうというふうな。実際そうやって戻ってこられる方かなり多いですけども、そういったことになるのかなと思います。

これまでの高知県で行われたいろんなプロジェクトがあると思います。先ほどアクティブ・ラーニングの話をしましたけれども、「ことばの力育成プロジェクト」、パンフレットにも書いてますが、そういったものもそうですし、キャリア教育もあります。高知新聞社さんが協力して広げているいわゆる「NIE教育」というものもあって、いろいろ地域の課題を考える、知るという手段は既に成

パネルディスカッション⑤：全体

されていると思います。ただ、それだけでは十分と、今までもそれをしていたということで。これからどのように深めていくか、変えていくかという中で、高知大学、地域の大学が3大学ありますので、大学とそういった教育現場とうまく協働で課題に取り組むような姿勢をつくっていく、繋げていくというか、学びを繋げていくということも重要だろうと思います。

最初に言いましたけれども、学校現場だけではやはり十分とは言えないなと思います。学びの場というのは学校だけではありませんので、家庭であったり、地域であったり、それから企業の皆さんにも協力していただくこともあるだろうと思います。そういったところでいろんな取組を知る。新聞を通じてということもあるかもしれませんが、直接インタビューをしながら。今、高知西高校がやっているのは、直接企業の方に話を聞くというようなこともありますけれども、そういった生の情報・話題をきちんと学びの中に取り入れていくということも重要だと。これはあまり高校とか大学とか区別はないと思います。学びの中でそういった地域をどう理解するのかということも重要になってくるだろうと思います。高知の中でどういった特色ができるかなというときに、そういった高知が持っている資源をいろいろと活かすということ。

これは、今、私がお話したことは一見するとなかなかグローバルに結び付きにくいように思われるかもしれませんが、やはり延長線と言わず、物の見方、考え方は基本的に地域で起きていることを理解するのが一つのやり方だろうと思いますので、これは、まだ地域の中で見ただけの話だなというふうに捉えていくと、やはり、外の視点で考えたり、海外に行ってみたり、繋げてみたり、そういったことがまた重要性を理解してもらえるのかなというふうに思います。

(コーディネーター)

石筒先生ありがとうございます。

私自身は、実はローカルの問題解決におけるスキルというのは、グローバルな問題解決におけるスキルと同じスキルなのではないかというふうに思ってるんですね。また、企業の話もできましたけれども、経団連の企業として、大企業の企業の代表として今日来ていただいているわけですが、この高知県でIBの教育が始まる、しかも公立の学校で始まるといったことに関しまして、田宮様のご意見はいかがでしょうか。

(田宮直彦氏)

大企業を代表してなどとおこがましいことは言えないんですけども。高知で始まることに関してですが、正直申し上げて、私は東京で生まれ育ちまして、大学は北海道に行ったものですから、あまり高知に詳しくなくてそれがコメン

パネルディスカッション⑤：全体

トするのがいいのかなというふうに思いますが。

事前にいろいろネット等で調べさせていただくと、坂本龍馬はもちろんのことなんですけれども、岩崎弥太郎さんもでた、ここの産だそうですね。そういう意味では積極進取の姿勢とか風潮とかというのがあるのだろうというふうに思います。

先ほど石筒先生の話にもありましたけど、高知は課題解決先進県だということですので。日本は少子高齢化という意味では、先進国の中でも社会的な課題の課題先進国だというふうに思いますので、ぜひ高知で積極進取の姿勢を生かして、そういう社会的な課題を解決していく、資する人材づくりをしていただければなというふうに思います。

もう一つは、これまでバカロレアのプログラムを適用してきている学校というのは、やはり東京とか大阪、京都とか首都圏が多いんですね。かつ、私立校が非常に多いということで、私は文部科学省のバカロレアの検討会でも、産業界の代表として言わせていただいたんですけども、やはり一般のサラリーマン家庭からすると、私学のバカロレアというのは敷居が経済的に高くて、そういう意味では、ぜひこういうふうに地方発で、かつ公立校でバカロレアをやっていただくというのは非常にありがたいなというふうに思っております、ぜひ、他県をリードするような形で、バカロレアの公立校の推進というのを広げる原動力になっていただきたいなというふうに思います。

最後に、先ほど東大の長谷川先生からも、学生の多様性という話がございましたけれども、我々企業の方も、私は4年ほど前にアメリカから戻ってきて今の立場になって採用も担当しているんですけども、当時の採用のやり方を見ると、大量にネットで募集をして、ネット上でのWebテストをやって絞り込んで、さらにそれを面接で絞っていくんですけども、採った学生を見ると面接慣れした、面接で、何て言うんですかね、言うたらあれですけど、ペラペラ喋れるそういう人材ばかりを採って、学校の属性を見ると東京の私大が非常に多かったんですね。それでいいのかというふうに思っております、去年ぐらいから意識的に地方国立大学を回って、言葉数は多くないかもしれないけれど、光る原石を探して来いということで、今そういう活動をやっております。

残念ながら、今年の内定者に高知大学はいらっしゃらないんですが、できればIBを通して高校生も鍛えていただいて、高知大学でまたその学生を磨き、地域を支えるリーダーをつくるのもいいんですが、できればそこからグローバルに戦える日本の企業を、グローバルに戦えるような人材も育成していただければというふうに期待しております。

(コーディネーター)

パネルディスカッション⑤：全体

長嶺さんはいかがでしょう。

(長嶺沙綾子氏)

今の田宮様のお話にあったように、私が中学1年生のころ、東京に住んでいたわけなんですけれども、そこでIBをやっている学校というのは聞いたことも見たこともなかったんですね。実際に当時公立で国際バカロレアをやっているような学校はなくて、初めて私がインドに行ったときにたまたまその学校がIBをやっていて、その仕組みを知ったということになります。

当時、ロンドンの方に引っ越して、なんでIBをやろうかと決めたかといいますと、父が非常に転勤の多い職業だったので、IBだったら例え高校の途中でまた引っ越したとしても、全然別の国でもまた続けられるのではないかと、そういう考え方があったのと、後は実際に海外に行っていて、お子さんが海外の学校に行っている親たちに聞いてみると、国際バカロレアの評判が非常に良かったという二つがあったからなんです。ロンドンでIBを始めて、結局私の家族は、私がIBを1年終わった時点で日本に帰ってしまっ。私はそこで日本に戻らず、IBを1人で残って最後までやろうという決心をしたわけなんですけれども、1人残ってIBをやり遂げるということに不安はあったんですけども、学校の先生のサポートですとか、友人、両親、あとは日本からの応援とかもあって何とかIBを終えることができました。高校2年生のときに、日本に帰るという選択肢もなきにしもあらずだったんですけども、日本で受験を改めてやるよりは、残ってIBを最後までやった方がなにか得るものがあるのではないかなというふうに当時は考えていました。

そんなこんなで、私がIBをやったのは非常に特殊な環境だったんですけども、今回、高知に新しくIBの学校ができるということになって、私みたいな特殊な状況ではなくても、IBという選択肢が普通の高校でできるというのは非常に喜ばしいことだと思っています。大都市に住んでいないからIBができないとか、それこそ親の経済力のせいでIBの高校に通えないとか、そういうこともなく、学生の力の及ばないところで、学生の選べる道が狭まってしまうというのは非常に残念なことなので、高知に公立のIB高校ができるのは非常に意味があることかなと思っています。

もしもIBの学校ができて、日本の大学の入試もどんどん変わっていったとしたら、IBをとるということはチャンスを広げる非常に大きいことになります。もちろん、やろうと思えば、他県でなくても、外国にでも飛び出せていけるんですけども、先ほどお話があったように、外国に行って戻ってこなかったらどうなるのかみたいな話がありましたけれども、私自身も海外で勉強して、結局、社会人というか、会社は日本で働くことを決めたんですね。海外に行ってそれで日本の良さとか、自分の故郷の良さというのは改めて感じることもある

パネルディスカッション⑤：全体

と思うので、今回高知に来させていただいて、高知のいろんな魅力的なところを見ていますので、海外に出られてもきっと戻って来られる人は多いんじゃないかなと思っています。

知識というのは貯め込むだけではなくて、実際に使わなければ意味がなくて、そのためにはいろんなことにチャレンジする必要があると思います。IBは非常に大変なプログラムで、それは誰かに言われてやっているのではなくて、自分で選択して責任持ってやるという側面があるので、プレッシャーというのはそのまま自分に返ってくる。それでちょっと大変なところもあるんですけども、IBをやりきることができれば、それは相当の自信につながると思うんです。その後IBをやればちょっとやそっとのこと、壁にめげずに、いろんなことにチャレンジするような、そういう力の原動力になるんじゃないかなというふうに考えています。

ですので、将来的にIBをすることを選択した学生の方々には、ぜひいろんなことにチャレンジしていってもらいたいなというふうに思っています。

(コーディネーター)

ありがとうございます。今の長嶺さんのお話で、私いくつか大変示唆にとんだことをおっしゃられたと思うんですが、まず一つは、今までは、実は私インターナショナルスクールを設立しまして運営しているんですけども、自分の娘達のためにつくったんですが、このインターナショナルスクールは、私の学校も国際バカロレア認定校なんですけど、まず授業料がめちゃくちゃ高いんです。そして、国際バカロレアの今までの認定校は、やはり首都圏にあって、しかも英語でしかDPはすることができなかった。国際バカロレアからきたPYP（Primary Years Programme：3歳～12歳までを対象としたプログラム）とMYP（Middle Years Programme：11歳～16歳までを対象としたプログラム）は、実は、国際バカロレア機構は「母国語でやってください」ということを言っているんです。

なぜかという、母国語の方が深く、ストンと落ちるからなんです。しかし、DPだけは、今まで英語か、フランス語か、スペイン語だったんですね。なぜかという、世界共通の12時間にわたる最終試験、この試験が3つの言語しかなかったからなんです。ところがこの度の合意、これは文科省さんが頑張ったんですけども、たくさんの科目で、日本語で卒業試験が受けられるようになった。これは大変大きなことなんです。そして卒業試験のスコアが、例えば仮に40だとしますと、そこでは英語で受けたスコアなのか、フランス語なのか、スペイン語なのか書いてないわけです。要は40のスコア、40の学力が世界共通としてあるという認識なんです。そして、その日本語で受けられる、なおかつ今まで授業料が高かった国際バカロレアが、ここ高知県では公立で受けられ

パネルディスカッション⑤：全体

るようになる。これは大変大きな動きであろうと私は思うんです。

このことに関しまして、松木さんいかがでしょうか。この高知で、公立で、国際バカロレアの認定校が、しかも日本語でたくさんの科目を学習できるようになる。これは多分他の日本の自治体の人達にも大変大きな励みになるんだと思います。一言いただけますでしょうか。

(松木秀彰氏)

国際バカロレア・ディプロマ・プログラムを採用している学校は、今、日本で26校あるというふうにご紹介したんですけれども、うち公立は実はまだ1校しかない状況でございます。東京都立国際高校だけと。他は、インターナショナルスクールであったり、私立であったりするんですけど、折角の優れたプログラムですので、できるだけ多くの生徒さんにこの学校に行く機会を与えたいというふうに思っています。そのためには、やはり公立校でこの国際バカロレア DP プログラムを採用してくれるところに、ぜひ増えていってほしいというふうに思います。

生徒さんは日本全国のどこに住んでいても、それなりに近くにそういう国際バカロレア校があって、頑張ってみようと思ったらそこに通って勉強をして、少しハードなところありますけれども、頑張って卒業するといったような選択肢が、できるだけ多くの生徒さんに与えられるということが理想的だというふうに私もは考えていて。そういったことで、200校という数字を掲げているわけですが、そういった観点で、ぜひ高知県さんにも公立校で国際バカロレアプログラムを始めて、グローバル人材育成に力を入れていただきたいというふうに思っております。以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

あともう一つ、実は、私の上の娘が「先生になりたい」ということを中学3年生のときに言いました。下の娘は虫が好きでございまして、虫について研究をしたいというふうに言ったんですけれども、今娘たちは23歳と22歳ですが、長嶺さんと同じように、娘たちが大学に入るときには、日本の大学では教育学部、もしくは動物学部の国際バカロレア認定校の門が開いてなかった。それが、国公立で今、たくさんの学部が開くようになってきた。これによって、高知の公立の学校に行き、そして国公立の大学で自分の学習したいと思う学部に入ることができる。

日本の国立大学は、授業料というのは、実は私、一昨日シンガポールで、シンガポールの保護者と生徒さんの前で、G30（※注1）ということについて話をしてきたんですけれども、53万円ちょっとということで、みんなが素晴らしい

パネルディスカッション⑤：全体

というふうに言っているんですね。私は、経済格差が教育格差になってはいけないと思っておりますので、こうして公立の学校で子どもたちが世界標準の教育を学んでいく。そして、その後国公立へ行って自分の学びたい学部を学んでいくという、この道が今できるといったところですがけれども、長谷川先生、その点について、お話していただけますでしょうか。

(長谷川壽一氏)

今日ご参加いただいている保護者の皆様方は、今日私たちが国際バカロレアの良いことばかりを言っているんじゃないかというふうに、もしかしてお思いじゃないかと思えます。私が保護者の立場だったら聞きたい、こういうことはどうなんですか、というところの大きなところが、「バカロレアのコースをとることによって大学進学が不利になることはないでしょうか」ということです。坪谷さんのお嬢さんのときには確かに不利だったんですけども、それが、先ほどの一覧表にもございますように、いろいろな大学が門戸を広げるだけでなく、国際バカロレアのディプロマを修了した人たちを積極的に受け入れようとしているということで門戸を開きつつあります。

それから、他のご不安としては、「ちゃんと企業に就職できるんだろうか」ということですがけれども、これも田宮様のご発言で、今、日本の伝統的な就活というのは日本の大学の卒業生を一斉に集めて、それで同じ時期に一斉に採るような就職のシステムなんですけれども、それが変わりつつあると。ボストンまでわざわざ出かけて行くという。それから今みたいな、今年でしたら8月以降でしたけれども、来年は6月からですか、そういう、時期によらず企業の側も就職の門戸を開きつつあるということで、大学の方も、企業の方も受け入れる学生さんの多様化というものを重視しているということです。

それから、ご懸念の点としては「経済的に負担にならないだろうか」ということですね。確かにこれまでのIB校というのは、一部の私立大学のお金持ちのお宅の御子息が行くという傾向がなかったわけではございませんけれども、東京では、都立国際高校で既に、来年の4月からですか、今もう応募していて志望者の倍率が10倍を超えていると聞いておまして、非常に多くの関心を。公立の高校ですので決して、授業料は他の都立高校と変わりがないと。その他に何か費用がかかるんじゃないですかということなんですけれども、それに関しても、今、私どものほうで様々なサポートの方法を考えておまして。そのところで国際バカロレアを、それを受講するために経済格差があってもいけない。これは坪谷さんの非常に強い信念ですので、それに基づいて我々もそれをサポートしている。

文科省だけではなくて、政府は閣議決定までしているわけです。閣議決定をして、18年までに200校にすると。ということは政府の公約でもあるわけです。

パネルディスカッション⑤：全体

から、政府の方のご支援も期待できるということで、まだまだ他に後でご質問も受けるかもしれません。ご懸念とかあるかもしれませんが、状況は大きく変わりつつあって、大学も企業も社会全体も受け入れようとしているし、政府も後押ししようとしている。このプログラムに関していえば、従来型の教育とは違って新しいタイプの人材育成を目指していると。

他のご懸念としては、例えば、「本当に東大に入るような高い学力を IB が提供してくれるんですか」ということもあるかもしれませんが。私も IB の教科書を実際に拝見させていただきました。今度、日本語で導入されている科目の一つに経済学がありまして、高校では今、社会科はありますけれども、経済という科目はありません。IB で経済を学ぶとどういう経済学かというと、これは明らかに現在の大学の教養課程の経済と大体同じレベルです。残念ながら IB の中には心理学は入っていないんですけども、私は心理学の教師ですが、IB の心理学のテキストを見るとこれは非常にバランスがよくて、これまた大学の教養レベルです。ですから、IB で心理学をとった学生がうちに来たら何を教えようかって逆に迷ってしまうぐらいなんですけども、そのように非常に高い水準のリベラルアーツ教育を施してくれるので教育水準も問題ないだろうと。

ただ、全く問題がないわけではございません。「教える先生が本当にいるんですか」。これは非常に大きな問題です。従来の高校のあるいは中学の先生がすぐに IB の教育課程に対応できるわけではございませんので、そのところの人材育成をしっかりと考えなきゃいけないということで、坪谷さんの方でも、また文科省さんの方でも、IB 担当の教員の養成について、今、真剣に考えているところということでございます。

したがって、様々なご懸念はあろうかと思えますけれども、それを想定してそれに対応すべく、こちらのサイドも一体となって準備を進めているところでございますので、ぜひ、IB に金の卵を送り込んで、ご家庭の方から、ぜひあなたはチャレンジしてきなさいというふうに若いお子さん、ご息子さんたちに背中を押してあげていただければというふうに思っております。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

私自身、都市圏に住んでいるとか親の経済力、これで例えば IB の教育は受けられないといったことがないようにということで非常に考えておりまして、ぜひ、高知県で公立の学校で IB の認定校を目指していただきたい。また、私、実は長谷川先生にも評議員になっていただいているんですけども、「世界で生きる教育推進支援財団」というのをなけなしのポケットマネーで作りまして、そして、必ずしもご家庭が経済的に恵まれていない生徒に対しても、安心して

パネルディスカッション⑤：全体

国際バカロレアの教育が受けられるようにということで、今、努力をしている最中でございます。

また、長嶺さんのお話の中に私もう一つ、ここで少し話をしたいなと思った点があるんですけども、長嶺さんがおっしゃっていた中で、学校の勉強以外一生懸命それをやっていたら受験勉強というのを取ってすることはなかったというふうに発言していらっしゃるんですね。実は、私の娘も2人ともIBのDPをとったんですけども、そうございまして、家での勉強量は本当に多いんですね。家に帰ってきてたくさん学校で習ったことを、そしてリサーチしなくてはいけないこと、予習、学校に行く前に仕上げなくてはいけないレポート、次の日のディスカッションまでに用意しなくてはいけないこと。ときには夜中まで泣きながら学習をしていたんですけども、学校で与えられるタスクに関して一生懸命やっていたらいいというところが基本だったんですね。

しかし、なかなか日本の高校の場合は、学校の勉強以外にも受験勉強しなくてはいけないという構造があるかと思うんですけども、そこら辺に関しまして、先ほど長嶺さんからお話もできましたけれども、いかがお考えになりますでしょうか。石筒先生とか、長谷川先生あたり、IBは学校の勉強を、IBの学習をきちんとしていればいいと言ったところが基本なんですけど、今までのあり方とちょっと違うと思うんですけど、どんなご意見でいらっしゃいますでしょうか。

(石筒 覚氏)

先ほどの長谷川先生の話、実際の学校現場での先生方のこの後の取組は、かなり重要にはなってくると思います。今、高知南高校、もしくは高知西高校で、先生方がいろんな、これはIBに合わせてというよりは、グローバル人材に向けた新しい学びのスタイルをいろいろ試行錯誤されているのかなと思います。

基本的には、今までのいわゆる教科の学びにマイナスになるということはないだろうというように考えていますけれども、やり方は大分違った要素があって、これは高知県だけではなくて全国的にIBに取り組まれる学校現場の方が、この後も含めていろいろご努力をされながら変わっていくのかなと思います。

ただ、基本的な考え方というか、学習者像にある中でこれをどういうふうに、これまでの学びと上手くあわせていくかという中では、今、実際に現場でやられる先生方の取組でもあるんですけども、やっぱり学び手の生徒が、なぜそういうふうになっていくんだろうとか、そういった主体的に考える要素をどのように付けていくのかですね。どうしても、いわゆる知識重視型のものというのはそこが十分できたと、大学もそうなんですけれども、言えなかったかもしれないかもしれませんが、そういった形で転換していかざるを得ない、いかなければならないと思っております。

やはり、なぜそれがそんなふうになってくるんだろうということの連続、常

パネルディスカッション⑤：全体

にそういったことを主体的に考えるような形に転換していくと。その中で、先生方の役割というのは答えが一つではない。こういう答えだからというよりは、いろんな「なぜ」に対して、さらにそれを深めていくようなサポートというか、そういった役割も求められてきて、これは少しこれまでとは違った先生方の求められる役割なのかなと。ただ、それを通じて、これまでもやられてきたいろんな教科の理解を深めていくということになりますので、ちょっとそこが今後どのようにこれまでのやってきた教え方というか学びのスタイルと合わせていくのか、変えていくのか。そこは一つ重要な課題だと思います。

大学からすると、これ実は大学の、特に初年時教育でやっているんですね。やはり大学でも同じような問いかけを大学教員がして、初年時だけではなくてずっとやっているようなものかもしれませんけれども、大学側もそういった学びをしてきた学生をどうつなげていくかというふうに変わってきていると思いますので、ちょっと具体的にこうだというふうにももちろんなりませんけれども、これまでの教えてきたスタイルと IB のものをうまく日本のやり方、高知は高知のやり方になるかもしれませんが、そこに合わせていくような取組が、今後重要になってくるだろうというふうに考えています。

(コーディネーター)

長谷川先生いかがですか。

(長谷川壽一氏)

長嶺さんがおっしゃったように塾に行かなくていいと。IB 校のバカロレアの学びを自宅でしっかりすれば受験勉強は不要、これは非常に大事だと思います。保護者の方にとっては、大体高校生から大学生にかけてお子さんがいるときというのは、生涯の中でも一番脛が細る時期なはずです。特に、課外の塾だとか通信教育だとか馬鹿にならないわけです。もしかしたら、家庭教師であったらもっとお金がかかります。それを高校の方、バカロレア校の中でやるプログラムをしっかり自分のところで、自宅でやればいいということは、親御さんにとっても経済的な負担が少なくて済むということで、そこもメリットじゃないかと思います。

今、石筒先生おっしゃったように学習者、すなわち生徒さんが何のために学ぶのかということ IB 校の方ではしっかり学ばせるわけですね。これも調査があるんですけども、先ほど申し上げました TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study：国際数学・理科教育調査) という国際比較の学力試験があるんですが、その中で生徒さんに質問する項目があります。「なんでこの学びが好きですか」とか「なぜこの学びをするんですか」ということなんですけども、諸外国 OECE の他の国に比べて日本の中・高校生は成績は高いん

パネルディスカッション⑤：全体

です。成績は高いんですけども、「何のために学ぶのか」ということに対して、それは「将来の職業に役立てるため」とかいうのが非常に少なく、「大学に入るため」という非常に目の前の動機なんですね。「その教科が好きですか」と言うと、それもかなり低いんです。ということは、やはり受動的な学びであって、自分が学ぶことが将来身に付くんだ、実るんだという実感がないまま知識を詰め込む。これは先ほど来言っているように、過去の成功モデルに依拠した学びだと思います。

というわけで、これから新しいシステムですから、過渡的には IB 教育はいろんな課題がこれからも多分出てくると思います。現在の一条校の学習指導要領に基づく、非常に緻密な教育とは違うタイプの教育ですので、ある意味そちらに生徒さんを送りこむことは本当にチャレンジングかもしれませんが、まさに先ほど僕が申し上げましたように「変わるコストと変わらないことのコスト」で、変わることによって得られる「利益」というのをきちんと考えると、やはり IB に挑戦する意義というのは私自身は非常に大きく、残念ながらうちにはそれに該当する子どもはおりませんが、もし、いたらぜひ送り込みたいというふうに思う次第です。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

今の中学1年生から、大学の入学資格審査のあり方がもしかすると変わるかもしれないというところですよ。私、実はいろんな教育事業しているんですが、そのうちの一つに学童をやっているんですけども、学童のお母さん方が小学校1年に入る時は「元気で外で遊んでくればいい」というふうなことをおっしゃるんですが、小学校3年生になると、いきなり受験必勝に変るんですよ。それで子どもはびっくりしちゃっているような状況なんです。そのとき私が「いや、今や大学も企業も求める人材が変わっているんですよ」と「お母さん方分かってますか」と言うんですけども、皆さん分かっていない。皆さんやっぱり必勝でやってこられたから、これから先、10年先も20年先も必勝だと思っているんですよ。

ですから、そこら辺も保護者の皆さんが、今、教育は本当に変わっているんだよ。大学で求める人材変わっているんだよ。企業が求める人材変わっているんだよ。ということ、もし今日のお話から少し感じていただくことができたらと思っています。

あと時間が10分程度になりました。石筒先生のほうから、今日のこのパネルディスカッションいたしまして、最後に一人ずつ、ぜひ今日の会場の皆さんにお伝えしたいこととお話していただけるとと思います。よろしくお願ひします。

パネルディスカッション⑤：全体

(石筒 覚氏)

一言でいいんですよね。もう簡単に。

(コーディネーター)

五言くらいでも構いませんが。

(石筒 覚氏)

これまでも高知県の取組として、高大連携の中でいろいろ関わりをもたせていただいております。大学の人間ですけれども高校現場にもいろいろ行くことがあって、その変化とか、いろいろお互い共有できる課題とかも一緒になって取り組んでまいりましたので、実際に高知でIBに取り組むという中で、これは、特に大学としてということになるのか、個人としてとなるのか分かりませんが、ある程度できる支援を総動員をしながらこのプログラムを作っていくかないと。これは高校がやったから高校だけの問題だというふうには恐らくならなくて、地域や企業、大学、もしくは中学校、小学校、そういったところが一緒になって取り組むようなことが出てくると思いますので、その中でどういった役割ができるか分かりませんが、また少しでもお手伝いできればなというように思います。

(坪谷氏ニューエル郁子)

ありがとうございます。

松木さんいかがでしょうか。

(松木秀彰氏)

国際バカロレア・プログラマーの課題解決能力の育成に非常に大きな効力を発揮するプログラムなんですけれども、私自身、今の教育制度で教育を受けてきて文部科学省に入って、課題解決能力がないまま仕事を始めてしまって非常に苦勞をしたということです。教育制度がどうあるべきかとかいったことを我々考えているんですが、答えが一つではないわけなんです。その中から一つの教育政策を選びとって、国民の皆様に納得していただけるように説明するといったようなことが役人の仕事なんですけれども、そういった訓練をもっと高校のときとか若いときに受けていたら良かったのにとすることが本当に実感としてあると。こういった能力というのは、いろんな職業で多分求められるんじゃないかなと。マスコミ関係者になるということであっても、どういう記事を書くか、どういう観点で書くかとか。あるいは企業に勤めたときでも、上司にどういうプレゼンをするかとか、いろんなところで、社会に出て役に立つ能力をこの国際バカロレアで身につけることができるというふうに思っています。

パネルディスカッション⑤：全体

今の学校教育では知識に重きに置いているので、答えが一つあるといったような教育を受けてきて、一生懸命知識を覚えて、それも自分の人生にとっては非常に役に立っている面はあるんですけども、やはり社会に出て、答えが一つでない世界にいきなり放り込まれるということとあれですけど、飛び込んで、非常に苦勞するといったことは私自身の人生でもあったので、ぜひ、やはり課題解決能力の育成、特に、今後の混沌とした世の中を考えますと、やはり若いうちからぜひ身につけて欲しいなというふうに心から思っている次第でございます。以上です。

(長谷川壽一氏)

2点申し上げます。一つは、IBで行っている教育システムというのは、現在の東京大学の教育のシステムと非常に親和性が高いということです。というのは、東京大学は全国立大学の中で唯一「教養学部」という学部を持っていて、入学して最初の1年半は、理系も文系も一緒になってリベラルアーツ教育をします。要するに、専門に偏らない広い視野を身につけさせるということが東大の教育理念の根本の一つです。その東大の教養教育、リベラルアーツ教育の理念に書き込まれていることは、「人格の陶冶」という非常に難しい表現ですけども、人格教育も含まれている。これは、バカロレアの10の学習者プロフィールイメージ像と重なって、「心を開く」、「思いやりのある」、「バランスのとれた」、「振り返りのできる」というところと通じていて、IB教育と東大の教養教育というのが大変信用性が高く、東大としては、専門だけではなくて将来いろんなところで柔軟に対応できる力をつけるんだということとやってまいりましたので、非常に信用性が高いというふうに思っております。

二つ目は、丁度真逆のことを言うようではございますけれども。東京大学は、いわゆる最高学府の中でも日本のトップ校というふうに言われていて、規模も大きく巨象なんですね。そうしますと小回りが利かない。象は動き出したらなかなか止まれないという言葉がありますけれども、東大の教育改革、過去2年間、かなり変えたつもりなんですけれども、なかなか本格的には変わらない。東大の国際ランキング、国際ランキングにどこまで意味があるか分かりませんが、じりじりと下がっています。それは主に国際化の立ち遅れ、非常にドメスティックであると。東大の学生さんは優秀である、研究者も優秀でたくさん論文を書く。けれども、なかなかローカルのトップ大学ということで、国際的な脱皮がし切れていないということが東大の課題です。

我々としては、東大を変えていくためにも高校の方でIBのような新しいタイプの教育が成功することによって、東大の入試のシステムが変わることを加速させたい。今、推薦入試も大きく変わったように先ほど申し上げましたけれども、3,000人中わずか100人です。ほんの少ししか推薦入試で入ってくる人が

パネルディスカッション⑤：全体

いません。これを、200人、300人。300人でもまだ1割です。国大協の方針では30%まで、推薦、AO、IBで持っていくというふうに、それを公約したわけですから、IBの方がきちんと成長することによって、大学の入試改革が一層加速し、それが東大自身を大きく変えていくことを非常に期待しています。以上でございます。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

長嶺さん、いかがでしょうか。

(長嶺沙綾子氏)

今いろいろとIBの経験の話をさせていただいたんですけど、本当に当時は、いろんな課題があって大変だったという記憶もあるんですけども、振り返ってみると、本当にIBを2年間続けて、ちゃんと最後までできてよかったなというふうに改めて思っています。IBの学校に通わせてくれて、かつ一人イギリスに残って勉強を続けることを許してくれた両親に本当に感謝しています。

今日、何回もIBの求める10の学習者像というのが出てきたんですけども、改めて自分が本当にそれにどこまで成長できているのかなというのを見つめる機会になりましたので、これからも常に知識を追い求めて、成長を止めないでいたいなというふうに考えています。

このようなIBというものを、ぜひともいろいろな多くの方々を選べる道として整備していただきたいなと思っております。以上です。

(コーディネーター)

田宮さん、お願いします。

(田宮直彦氏)

先ほど来、企業の話をしていただきましたけれども、本当に今、グローバル化の中で企業自身もすごく変わろうとしているんですね。以前は、日本の企業と言えば真っ新な新卒を採って、大学の専攻も関係なく、企業の中で鍛えるからということで、一人前に育てたんだと思うんですけども、今のグローバル化にさらされる中では、これまで上司が経験したことだとかそのノウハウだとかが通用しないビジネスの世界になっていて、私は会社の中で若い人によく言うんですけども、「自分とこの部長や課長とかが答え持っているわけじゃないんだから、自分で考えろ」ということを言っておりますが、やはり今までの日本の教育がどうしても受動的だったのか、なかなかこう発言が出てこない、手が挙がらない。

パネルディスカッション⑤：全体

例えば、入社式で社長が講話をやって「なにか質問は」と言うと、手を挙げるのは外国人の留学生、その次に上げるのは女子学生ということになっていまして日本の男性は大丈夫かと思っているんですが、ぜひ、こういう国際バカロレアのようなプログラム使って、バカロレアじゃなくてもいいんですけど、実は。能動的に自分で物を考えて、自分でアクションを起こす。そういう人間が増えてこない、日本の企業も日本の社会も駄目なんじゃないかなというふうに思っています。

ちなみに、先週ボストンに行きまして4日間いまして、50、60人の人に来てきたんですけども、その前からWeb面接等もやっているのも最終的に10名ぐらい内々定して帰ってきたんですけども、そのうちの2名はバカロレアのプログラムで育った方でした。が、2人とも海外で教育を受けた人で、1人はシンガポールインターナショナルスクール、もう1人は海外で中学までやって、横浜に帰ってきて横浜のインターナショナルスクールを受けて、大学はまたイギリスに戻りましたっていう学生さんでした。面接をやっている、ご自分の意見を丁寧に整理されて話をされるので、非常に楽しい面接だったんですけども、ぜひ、近い将来、日本の学校を普通にバカロレアで学び出てきた人とそういう面接ができることを期待しています。

(コーディネーター)

ありがとうございます。

私は高知の方で、高知県のグローバル教育推進委員としても石筒先生と一緒に関わらせているんですが、高知に来るたびにますます高知が好きになるんですね。なぜだろうと思ったんですけども。実はこの高知には、明治維新、日本を変えたスピリットが皆さん一人ひとりの中に生きているんですね。私はそれを、体で、心で感じる事ができるんです。ですから、この高知から、国際バカロレアの教育が公立の学校で始まるというこの動きを本当に心から期待しておりますし、そのためには私自身も一生懸命頑張って応援したいというふうに思っております。

今日はパネリストの皆さん本当にどうもありがとうございました。これにてパネルディスカッション終わります。

本日皆さんどうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

コーディネーターを務めていただきました坪谷様、そしてパネリストの皆様にもう一度大きな拍手をお願いいたします。

大変貴重なお話等をうかがっていて、元気が出るような将来に光を見いだす

パネルディスカッション⑤：全体

ことができるようなお話、励ましをたくさんいただいたような気がいたします。

それでは、このまま引き続いて閉会行事を行わせていただきますので準備の方をお願いいたします。コーディネーター・パネリストの皆さまも着席のままお待ちください。

◎閉会行事

(司会)

では、お待たせをいたしました。

閉会のご挨拶を、高知県教育委員会事務局教育次長の中山雅需が申し上げます。

(中山教育次長挨拶)

本日は、高知県グローバル教育シンポジウムを開催したところ、このような多数の方々に出席いただきまして本当にありがとうございました。また、グローバル教育、あるいは国際バカロレアということにつきまして、講師の皆様方には本当に分かりやすく、皆さん方もご理解いただけるようなお話をさせていただいたのではないかと思います。本当にありがとうございました。会場に来られた皆様方も、なぜ今グローバル教育が必要なのか、そして国際バカロレアというものがどういうものであるということが理解できたと思います。

あえて私の方から繰り返すまでもありませんが、今、一地方、あるいは一つの国家だけで物事が解決する、そういった時代はこれから来ないと思います。地球規模で考えて、地球規模で課題を解決していく、そういったことが必要になってくると思います。そういったグローバルな教育を国際規格でやっというものが、この国際バカロレアではないかと思います。

冒頭にも教育長の方から話がありましたけれども、平成30年の新しい中高一貫校では、この国際規格の教育に取り組もうとしています。それは単なるこの新しい学校のためだけではなく、それを取り込むことにより高知県の中・高等学校の教育にも役立つものと思っています。お話を聞いてお分かりだとは思いますが、課題は本当にたくさんあると思います。しかしながら、その課題をひとつひとつ解決していくことが他の中・高等学校の教育にも役立っていくと思いますし、ここにおられます委員の皆様方のご支援を得ながら、そして、ご指導を得ながら一つずつ解決していきたいと思っています。高知県で生まれた子どもたちが単なる高知の宝だけではなく、日本の、そして世界の宝となるように、なにかワクワクとするような、教育に取り組んでいきたいと思っています。

本日は、国際バカロレアということでグローバル教育のシンポジウムを行い

パネルディスカッション⑤：全体

ましたが、本日のこの場が高知県のグローバル教育のキックオフの場となりましたことを感謝申し上げまして、閉会にあたっての私の挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

(司会)

高知県教育委員会から、中山雅需教育次長がご挨拶を申し上げました。

以上をもちまして、高知県グローバル教育シンポジウムを閉会させていただきます。

では皆様、今一度大きな拍手で、パネリストの皆様、コーディネーターの坪谷様をお送りください。ありがとうございました。

長時間お付き合いいただきまして本当にありがとうございました。

お帰りの際には、お忘れ物のごさいませぬよう、お席の周囲を改めていただきますようお願いいたします。また、お気をつけてお帰りください。

本日、託児サービスをご利用になりました皆様にご案内を申し上げます。託児室は、この会館の1階の応接室を利用いたしました。エレベーターで1階まで降りられましたら、1階のスタッフに声をおかけください。ご案内をさせていただきます。

長時間にわたりましてのお付き合い本当にありがとうございました。

(※注1) G30

グローバル30とは、文部科学省事業「国際化拠点整備事業(大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業)」を指します。グローバル30に採択された13大学においては、留学生等に魅力的な教育を提供し、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる人材の養成を図るため、海外の学生が我が国に留学しやすい環境を提供することを目指してさまざまな取組を行っています。採択された大学は、以下の13大学です。

東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、慶応義塾大学、上智大学、明治大学、早稲田大学、同志社大学、立命館大学

(<http://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/> より)